

## 【第1部】基調講演 小泉 凡 (小泉八雲の曾孫、民俗学者)

### 小泉八雲作品の舞台化、資源化をめぐる試み



小泉 凡氏

#### ＜プロフィール＞

東京生まれ。小泉八雲の曾孫。

成城大学・同大学院で民俗学を専攻後、1989年に松江へ赴任。妖怪、怪談を切り口に、文化資源を発掘し観光・文化創造に生かす実践研究や、小泉八雲の「オープンマインド」を社会に生かすプロジェクトを世界のゆかりの地で展開する。主著に『民俗学者・小泉八雲』（恒文社、1995）、『怪談四代記―八雲のいたずら』（講談社、2014）ほか。日本ペンクラブ会員。小泉八雲記念館館長・焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。令和4年度アカデミア賞【文化・社会部門】受賞（一般社団法人全国日本学士会主催）。

小泉 凡氏：みなさん、こんにちは。小泉凡と申します。本日はお招きいただき、ありがとうございます。久しぶりにオンラインではない対面の会に参加できて、また大好きな三河地方に来ることができて、大変うれしく思っています。もう7、8年前になると思うんですが、田原市の図書館の催しで『ふしぎ文学』をテーマとしたシンポジウムがありまして、その時に内浦さんと初めてお会いしました。それ以来、お付き合いさせていただいています。今日はお声をかけていただいております。

#### 小泉八雲の作品の舞台化、資源化をめぐる試み

八雲の『耳なし芳一』の作品を、今、琵琶曲として15分に縮めて（村田青水さんに）演奏していただきました。（本日は）そういった作品を紡いできた作家小泉八雲の舞台化、資源化をめぐる試みというものを、私が関わった事例を中心に紹介させていただければと思います。『舞台化』といっても必ずしも舞台の上で表現する芸術活動、芸術表現というのではなくて、もう少し広く捉えて『文化創造活動』、あるいは『観光に生かす取り組み』というものを含めて、本日はお話しできればと思っています。

最初に、かねがね僕は思っているのですが、作家とその作品というのは、あるいは歴史上の人物についてもそうだと思うのですが、基本的に愛読者の方にとって鑑賞の対象だと思います。また研究者にとっては、研究対象である。それからコアなファンの方にとっては顕彰の対象だと思うのですが、もっとその枠組みを超えられるんじゃないかなという思いがあります。いろいろな活動をする中で実感しているんですが、人物やその事績に新しい意味付けをして、まちづくり、観光、文化創造・交流、いろいろ生かしていく可能性があるのではないかと考えています。

## 怪談は、松江の文化

（会場スクリーンに『松江ゴーストツアー』で使用するバスの写真などを投影しながら）松江では、「怪談のまち」という側面をクローズアップすることは憚られていました。でもよく考えてみると、松江を愛した小泉八雲は多くのそこで採集した怪談を世界に紹介しているわけだし、怪談が多いということは、人間中心主義ではないということ。異界とか、自然を畏怖する、そういう人々の心が生みだすものが怪談なのだから、むしろアピールしなくてはということで、いま松江市営バス1台に『松江ゴーストツアー』のラッピングがしてあります。普段は路線バスとして走っていますが、時々これが怪談ツアーに使われたりします。（スクリーンに投影された上の写真の）ニューオーリンズではゴーストツアーは何種類もありまして、これはホーンテッドヒストリーツアーズ（Haunted History Tours）というゴーストツアー専門の旅行会社のツアーのメニューです。怪談を聴くツアーと、吸血鬼のゆかりの地を訪ねるツアーと、ブドゥー教のゆかりの地に行くツアーと、お墓に行くツアーと、さらにはダウントウン（都心）ではないガーデン・ディストリクト（Garden District）の怪談を聴くツアーと、5種類もやっていて、しかもそれを1日に何回も開催している。そこに世界の人が、喜びや感動を覚えているんですね。

## 『文化資源』という考え方

私が参考になるなと思ったのは、『文化資源』という考え方です。僕自身が勤めていました島根県立短大で今から15年前くらいに「文化資源学」というコースをつくりました。その時に単なる地域文化コースではなくて、もう少し現代と結びつくというか、社会・文化と経済の垣根を取り外すというか、そういう名前がないかなということで『文化資源』という言葉に行きつきました。

法律的にも、戦後1950年に「もの」として文化財を大事に保存しようという法律『文化財保護法』、当然ながらですが、これができます。さらにそれから半世紀経った2001年には『文化芸術振興基本法』ができて、いまは『文化芸術基本法』ですけれども（注1）、ここではむしろ「もの」より「こと」、保存だけでなく活用も大事だという視点での法律ですので、そういうことにも裏付けられて『文化資源』という考え方が広まっていったのかなと思います。

（注1）以下、「文化庁」Webサイトより要約引用。

日本の文化芸術全般にわたる基本的な法律として「文化芸術振興基本法」が平成13年（2001年）に成立し、平成29年（2017年）に「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律」が成立、公布施行され、名称も「文化芸術基本法」と改められた。

もちろん文化資源は地域文化の総体を指しますが、でも文化財とは少し違うんですね。「文化財に含まれないものを、むしろもっと重視していきましょうよ」ということです。従来評価されてこなかった有形無形の文化、まさに怪談なんかそうだと思いますが、それを観光や地域振興、まちづくりなど社会的な活用の方向性を持った形で使うときに、この言葉を用います。『文化資源』は、建物やまちなみなど（ハード）、祭りや四季の行事、当地奥三河の花祭りなど（ソフト）、歴史上の人物とか作家など（ヒューマン）の三種で構成されると言われています。

## 「社会にどう生かすか」という着想を重視する

こういう考え方を推進してきたのは木下直之先生です。この方を中心にして2000年に東京大学の大学院に『文化資源学専攻』が設置されました。その2年後には『文化資源学会』ができて、私もその会員なんですけれども、その学会の趣旨をみてみますと、「多くの死蔵され、消費され、

活用されないまま忘れられていく（これは郷土の記憶ですよ）資料を、新たな文化を育む土壌として資源化し活用可能にすること」を目的として学会をつくる、と。だからこの学問は机上で研究するだけではなく、むしろ方法論、どうやって社会に生かすかという、そういう着想を大変重視しているのです。

確かにそのまま使われないで溜まっていく資料、それが場合によっては忘れられたまま死んでいく資料というものも、たくさんあると思います。新たなものをつくることももちろん大事ですが、そういうものを発掘して新しい着眼点で現代にふさわしいプロデュースをしていくというのはすごく大事なことでないかなと思っています。木下直之先生がおっしゃっているように、「学問分野よりは、方法、着想だ」と。それから「座学、学術性至上の価値を見直す」、そういうところにも目的があるんだとおっしゃっています。

木下先生は浜松のご出身でいま静岡県立美術館の館長をされていますが、なぜそうした着想に思い至ったかということをご自身でも書いていらっしゃいます。「昔僕が子どもの頃は浜松城があった。それはまさにハリボテの城だった。文化財的価値は何もないんだけど、そこでいろいろな催しが行われたんだ。ハリボテの城でも活用できるじゃないか、そういう着想だった」とおっしゃっていますが、これからはそのような視点で文化創造活動を行うことが大切ではないかと思っています。

#### 小泉八雲の生涯、約30冊の著書を残す

これを小泉八雲に当てはめてみるといろいろな事ができそうだと最近わかってきました。ここで少し（八雲についての）基本情報をお知らせしたいと思います。小泉八雲は1850年にギリシャのレフカダに生まれ、1904年に東京で亡くなっています。ギリシャで生まれて、アイルランドで育って、イギリスとフランスで教育を受ける。19歳で大西洋を一文無しの状態で渡り、オハイオ州のシンシナティとルイジアナ州のニューオーリンズで約20年間ジャーナリストとして過ごします。さらにカリブ海のマルティニーク島で2年間を過ごし、ここでは人類学者のような日々を送って、最後日本では14年間を過ごしました。日本では松江と熊本、神戸、東京に住みました。その人生は地球半周を超える片道切符の旅でした。本名はパトリック・ラフカディオ・ハーンといひましてアイルランド人です。当時はアイルランドが独立国ではありませんでしたので、イギリス国籍ということになります。

ただ作家というだけでなく文学の研究者でもありましたし、日本では仕事としては教師。それも旧制中学、旧制高校、大学で教えていました。それからジャーナリストでもあるし。当時まだ民俗学という日本語がありませんでしたけれども、八雲がやったことを振り返れば民俗学者の仕事だったのかなという気がします。こういった、多面性を持っているところが「文化資源化」を試みる際にも魅力的なのだと思います。

八雲は生涯で約30冊の著書を残しています。初版本の表紙って結構きれいなんですよ。八雲の得意分野はルポルタージュの紀行文を書くことと、それからもう一つは再話文学。先ほどの『耳なし芳一』に代表されるような元々は口承文芸、あるいは文字化されたもの、それらを元にしてさらに文学、芸術としての魂を吹き込んで現代的に英語で語りなおし、世界に紹介するという仕事が大変得意だったわけです。

## 八雲の『オープンマインド』な眼差し

八雲が興味を持つものには、一見「負の文化」と思われがちな、怪談や感染症などがあります。怪談には「一面の真理」があると言い、感染症に関する作品も少なくとも6つ残っていて、そこではパンデミックの中で発揮される人々の勇気とやさしさについて描出しています。また、30代の頃には、ニューオーリンズの郷土料理であるクレオール料理のレシピ集（世界初）を出版しています。西洋中心主義やキリスト教中心主義に陥ることなく、その土地の文化をリスペクトする『オープンマインド』な眼差しで郷土の文化を捉えようとしたのだと思います。

八雲はいろいろな苦勞をしていまして、4歳で母と決別し、16歳で左目を失明し、公園で寝泊まりするどん底の暮らしも経験しています。それから2度にわたって感染症に罹患し、日本に来る前に死んでいてもおかしくないようなカタストロフィも味わっている。そういうところから『オープンマインド』な眼差しというものが育まれたのかなと思っています。現代社会においてこの『オープンマインド』という精神性はSDGsにもつながる大事な考え方だと思います。

これから具体的に、小泉八雲の資源化の事例をご紹介しますと思います。小泉八雲の作品で一番舞台化されているのは『雪女』じゃないかなと。『耳なし芳一』と同じく『怪談』に収められた有名な作品ですが、早くは1965年に小林正樹監督の映画になりましたし、アニメにも、最近でもまた映画が作られています（2017年、映画『雪女』、杉野希妃監督）。愛知県知立市ではコンテンポラリーダンスで『雪女』を表現するという公演もありました。あとは名古屋の方たちがオペラで『雪女』を上演されました（2016年、創作オペラ『雪おんな』）。『雪女』の作品は、本当に数多く舞台化されていますね。

## 『松江ゴーストツアー』、怪談の資源化を目指す文化観光

次は私が直接関わったものをいくつかご紹介させていただきます。まずは『松江ゴーストツアー』です。「怪談の資源化を目指す文化観光」ということなのですが、2008年に僕が考案してもらいました。ちょうどその頃、国土交通省が新しい地域発のツーリズムプランをつくっていきこうと積極的に推し進め、助成金制度もありました。『松江ゴーストツアー』で応募したら、たまたま島根県から唯一通ったんですね。それは、『怪談』というコンセプトが面白いということと、夜のツアーだということが評価されたのです。普通は観光客が歩かない時間に、しかも夜だからあまり見えないですよね。怪談の舞台を歩き、語りを「耳で楽しんでもらおうという方法が面白い」ということになったようです。2008年から2017年の10年間で316回、5,000人あまりの方に参加していただきました。

そのヒントになったのは、ダブリン（アイルランドの首都）のゴーストバスでした。ここでは毎日ダブリン市交通局が直営でゴーストバスツアーをやっている、これに乗った時に感動したんですね。語り部が凄すぎる。もちろん、俳優さんが語りをしているんですが、それから文学の勉強にもなる。「ブラム・ストーカー（アイルランド人の小説家、著作『ドラキュラ』など）がここに書斎を構えていたんだ」とか、そういう知的な刺激も受ける。世界中の人がこのチケットをゲットするために、朝一番から交通局本社の窓口に並ぶ、そういうツアーです。

## 超自然の文学には必ず一面の真理がある

翻って、松江でも同じくらい怪談はあるのに、今まで記録はしても資源化はしてこなかったなと感じたのです。そこで『松江ゴーストツアー』を思いついたのですが、ただこういうスピリチュ



アル的なツアーを考えるとときはすごく大事にしなければならないことがある。それは、八雲はこういう風に言っているんですね。「超自然の文学には必ず一面の真理 (truth) がある。」(『文学における超自然的なものの価値』小泉八雲)。真理ですから「時空を超えて変わらない本当のこと」のような意味だと思います。そういうことをしっかりと伝えられなければいけない、単なる肝試しになっては決していけない、ということを念頭におきました。そのうえで、主催者も参加者も豊かな遊び心を持つことを、闇を歩くことを通して、特に都会から来た方に自然や闇への畏怖の気持ちを出してもらいたい。それから、目ではなく耳で楽しむこと、お一人お一人に怪談の真理を考えてもらう、ということを取り組んでいます。

具体的には、このツアーは、夜2時間に渡って語りを聴きながら八雲が『怪談』で紹介した舞台を回っていくという、徒歩のツアーです。(スクリーンにゴーストツアー参加者数の推移などを示す表を投影しながら)こちらを見ていただくと、意外にも、4年目以降県外者の割合が7割を超えるようになってきたことがわかります。ということは、本ツアーは夏場を中心に月2、3回開催していますが、わざわざ『松江ゴーストツアー』に合わせて山陰旅行を県外の方が計画してくださる。そういうことが見えてきました。やっぱり怪談は観光のコンテンツとしてもけっして馬鹿にできない。文化資源、観光資源になり得ることがわかりました。

そんな中で先ほどご紹介しました、松江市営バスを1台ラッピングすることによって、「松江は怪談のまち、怪談文化という一つの文化があるんだ」という評価、そういうものを市民の方にも知っていただくことができたと思います。観光客の方にも「あっ、このバス何だろう」って思ってもらえる、そういう狙いがあります。

### アイルランドは『妖精の文化の国』、目に見えないものの資源化が進んでいる国

そういう意味では、八雲の祖国アイルランドは、『妖精の文化の国』なんですね。非常に『目に見えないものの資源化が進んでいる国』だと思います。

アイルランドの首都ダブリンには7、8年前に『国立妖精博物館』(National Leprechaun Museum)ができました。国が「妖精は我々の資源だ、宝だ」と認めたということなんですね。この博物館は、まず、異界へのトンネルを全員くぐっていくんです。その向こうには展示物は何もありません。語り部が妖精の話を5つの部屋でそれぞれ聴かせてくれて、もう出口なんですね。そして出口には巨大なミュージアムショップが。こういうミュージアムがあってもいいと思うんです。目で展示品を見るだけがミュージアムではないと思います。

### 怪談文化の広がり事例

あともう一つうれしいのは、松江のゴーストツアーがちょっと評判になって、お隣の鳥取県の琴浦町の町おこしの会の方たちが、「やりたい」と訪ねて来られたのです。グループの何人かが一生懸命、琵琶と語りを学んで、小泉八雲とセツが新婚旅行で泊まった中井旅館を舞台に活動しているのです。

あるいは彦根では、滋賀大学と彦根観光協会とが連携して『空の旅人舎』いう団体をつくり、そこが『彦根ゴーストツアー』をやっています。いまはコロナ禍であまりできていないのですが、大学と観光協会の連携というのが面白いですね。これは「泊りがけの文化探訪ツアー」という大変贅沢なツアーで、旭堂南海さんという講師の方にもツアーのテーマにあわせた講談をやっていただき、僕もツアーの中でミニレクチャーをしています。

松江では行政も段々その気になってきて、「これからも怪談文化を広げていこう」と、『松江怪喜宴』という催しをやっています。コロナ禍でここ2年はできていないのですが、今年（令和4年）9月にまた行う予定です。木原浩勝さんって、ご存じですか。『新耳袋』という現代の怪談を集めた本でベストセラー作家になった方です。10年程前、突然木原さんからお電話があって「一緒に談義しようよ、しかも松江で」と。怪談文化を掘り下げていく可能性を探ろうということで始まったのですが、今年で8回目になります。その中で「談義だけでなく、もっと面白いパフォーマンスをしようよ」となりまして、茶風林さんという声優さん、サザエさんの波平さんや名探偵コナンの目暮警部の声とかをされている方です、それと茶風林さん率いる声優さんたち7、8人が来てくださりまして、小泉八雲の怪談と木原さんが集めた現代の怪談を交互に読んでいくというパフォーマンスです。これが今非常に好評で、日本各地から多くの方が来てくださっています。

### 『小泉八雲 朗読のしらべ』、総合芸術の広がりファン層の融合

それから、『小泉八雲 朗読のしらべ』を2008年ごろからやっています。松江出身の俳優・佐野史郎さんの八雲作品の朗読と佐野さんと同級生で世界的なギターリストの山本恭司さんの音楽、そして私がトークをするんですが、これまで60回以上国内外で公演をさせてもらっています。すなわち八雲文学の魅力を朗読と音楽とトークで伝えていくというものです。

（スクリーンに『小泉八雲 朗読のしらべ』の舞台写真を投影しながら）これは2019年、コロナ禍になる直前にニューヨークで公演をしたときの写真です。ちょうどこの年は、八雲がアメリカに渡って150年という節目の年だったんですね。佐野史郎さんの朗読というのは淡々と読むのではなくて、感情移入をして俳優として読む朗読なので半ば演劇という感じです。恭司さんのギターが加わると、全体としてライブという感じがするんですね。最後は私もピアノを弾かせてもらって、3人で八雲が一番好きだったアイルランド民謡を演奏して終わりました。

うれしいのは、今まで、佐野さんの舞台を追っかけていた人たち、山本恭司さんをライブハウスに追っかけていた人たち、小泉八雲を愛読していた人たち、全然別だったと思うんですね。これをやったことで三者が融合し始めたんですね。今日も実は山本恭司さんのファンの方も（会場に）来てくださっていて、ありがとうございます。音楽と文学、朗読、演劇…、総合芸術の求心力というものなのかと感じます。このようにして輪が広がっていきました。

海外でやった時も、しっかり海外まで追っかけてくださる方が、数は少なくてもいる、その辺も非常にうれしいことです。

### 八雲作品を狂言に、アイルランドで上演

伝統芸術を使った作品表現というものもやっています、友人でもある滋賀大学の真鍋晶子さんが発案したんですが、「アイルランドに茂山千五郎家（大蔵流）を連れて行って小泉八雲の作品をやってもらおうよ」と茂山家にお声がけしたら、「ぜひやりましょう」ということで、新作狂言を2つ作ってくださったのです（2017年公演）。

一つは八雲の作品『ちんちん小袴』という付喪神の話です。怠け者のお姫様が、面倒くさいから爪楊枝で歯をほじくっては畳の縁に埋めていた、そうしたら夜中に爪楊枝の精霊たちが怒ってその娘を諫めに来る。♪ちんちん小袴、夜も更けて候～と踊りだした、というお話ですけれども。これがアイルランドの小人妖精の話と非常によく似ているんですね。それと狂言にもあります地謡（じうたい）の声が、アイルランドの最も古い歌唱法であるシャーン・ノースと非常に似ている。

その響き合いもあって、大変アイルランドの人たちに喜ばれました。

もう一つは『若返りの泉』という作品が狂言になっています。最後は観客と演者が一体化できたということが非常にうれしかったですね。

(公演時の集合写真を投影しながら) これはアイルランドの南部のウォーターフォード市で公演した時の様子です。このように『朗読のしらべ』も狂言も、一過性のパフォーマンスではなく持続可能な文化資源・芸術資源という視点で、今後とも機会があるごとに続けていければいいなと思っています。

### 八雲を通して『オープンマインド』の大切さや日本文化を学ぶ

『The Open Mind of Lafcadio Hearn Project』というプロジェクトが、あるギリシャ人の発案で2008年にスタートしました。発案者は、半世紀以上に渡って小泉八雲を愛読していた画商(アートディーラー)のタキスさんという方です。「八雲の根底には『オープンマインド』があるよね。これから持続可能な共生社会をつくるためには、それをもっと広める必要がある。じゃあ、アートでもっと広めてみよう」ということで、彼の知り合いの作家にWeb上で呼びかけたら47点の作品が集まりました。

造形作品で八雲の『オープンマインド』を表現するというものなのですが、それがギリシャで話題になりまして、このようにオープニングの日は賑わいをみせました。(スクリーンに八雲の造形作品の写真を投影しながら) 例えばこんな作品です。右側の写真ですね、バンゲロス・モスタカスはオリーブの木から八雲の普遍性が羽になって飛び立っていく、という作品を制作しました。左側の写真はセメントでつくられた作品ですが、私の祖父であり八雲の長男である一雄が、父の衣服(西洋の衣服)と日本の衣服をお互いにつないでいる、そういうものです。初年度(2009年)はギリシャのアテネで、翌年松江で、そしてニューヨークで、ニューオーリンズでと(展示が)続いていきました。

2014年には生誕地のギリシャのレフカダでシンポジウムを開催しまして、その時、9人(5カ国)のパネリストが八雲のオープン・マインドについて発表したのですが、こういう方向性が見えてきました。「自分がこうだと思っていることが絶対ではなく、それが最終の結論でもなく、そこから次に新しい道が開かれていく。子どもたちには、常にそういう新しい道を開いていくという場を提供しなければならない。」そういう方向性を確認しました。うれしいことにレフカダ市が市役所の使わない部屋を2つ提供してくださり、ヨーロッパ発の八雲ミュージアムが予算ゼロでオープンしました。日本からいろいろな八雲の遺品のレプリカなどを送ったり、本を寄贈したりして。今うれしいのは、子どもたちが八雲を通して『オープンマインド』の大切さや日本文化を学んでくれているということです。

松江市では昨年(令和3年)3月に文化条例ができました。文化こそ一番の産業に結び付くコンテンツだということで。(条例には)7つの柱があり(注2)、そのうちの4つ目に「小泉八雲が五感で感じた松江の生活文化」が入ったんですね。さらに、「自分だけの価値観で物事を解釈せず、多様性を尊重する心『オープンマインド』により、さまざまな価値を認めあうまちをめざす」という文言が条例の中に入りました。こうしてやってきた活動が条例の中にも組み込まれたのは、私たちにとってもとてもうれしいことです。

(注2) 以下、小泉凡氏の本基調講演用配布資料より抜粋。

松江の文化力を生かしたまちづくり条例(令和3年3月制定)の「めざすべきまちの姿7つの柱」

①古代から近代までの豊富な文化財、②地域に根付く伝統文化、③市民生活に根づく茶の湯文化、④小泉八雲が五感で感じた松江の生活文化→自分だけの価値観で物事を解釈せず、多様性を尊重する心「オープンマインド」により、さまざまな価値を認めあうまちをめざす、⑤市民とともに育む芸術活動、⑥伝統文化芸術活動の拠点となる施設、⑦宍道湖、堀川、中海等の松江の景観

もうひとつ興味深い事例をご紹介します。2015年にアイルランド・トラモアにオープンした、『Lafcadio Hearn Japanese Gardens』。「Garden」ではなく「Gardens」です。日本庭園って結構海外でいっぱいありますし、でも行ってみると「えっ、これが日本庭園？」というエセ日本庭園みたいなものも少なくないのですが、これはそうではなくて、八雲の人生を9つの庭で1ha（＝1万㎡：100m×100m）の土地に表現したというものです。一つひとつの庭にストーリー（物語）が作ってあるんです。トラモアという場所はアイルランドの南部の海の保養地で、八雲はここで泳ぎを覚えたんですね。9つの庭のテーマは『旅の始まりートラモアとの縁』『船出：未来の予感』『アメリカへの旅』『ギリシャの庭』『日本への到着』『せせらぎの庭』『森林』『平和と調和の庭』『生き神様の伝説』、これらを一周してもらおうと八雲の精神性がわかるというものです。現在では、ここで結婚式を挙げる若者がたくさんいるという話を聞いて、非常にうれしく思います。

ここ数年、コロナ禍で対面ではなかなか活動ができなかったのですが、（スクリーンにWeb会議で6名が笑顔で手を振る写真を投影しながら）うれしかったのは2020年にアフリカの研究者のアントニー・ゴデハウスさんという方が、アフリカ大陸で初めて小泉八雲の研究で博士号を取られたんですね。その記念でWebセミナーが開かれました。テーマは『The Open Mind of Lafcadio Hearn：Light from the East』。このときも、こういう方向性が導かれました。「ハーンの『オープンマインド』は、東洋と西洋、人と人、生者と死者をつなぎます。自分の思っていることだけが真実で他は不要という志向が現代に顕著に見られるけれども、八雲の思考にある統合性というのは分断の対極にある。現代社会にとっても必要だ」ということが確認されました。この時は南アフリカの首都プレトリアとニューオーリンズと松江を結んで行われました。

### 未来のまちを担う子どもたちに『郷土の記憶』を伝えていく

私はやはり、未来のまちを担う子どもたちに『郷土の記憶』を伝えていくということが一番大事だと思います。『子ども塾 スーパーヘルンさん講座』という教育プロジェクトを2004年から行っているのです。今年（令和4年）も早速7月から始まります。これは子どもたちに五感で郷土の魅力を感じてもらう活動です。『郷土の記憶』の継承ということにもなるのかなと思っています。学校での八雲の五感とオープンマインドに関する授業、五感とオープンマインドを体感する体操、匂いや音などを含め、五感を研ぎ澄ませたまち歩きを組み合わせた内容です。（スクリーンに講座の様子の写真を投影しながら）これが去年、一昨年の活動の様子ですね。3学期には学んできたことを子どもたちに自由に表現してもらいますが、去年は様々な太鼓を使ったりして楽器で表現してくれました。こういうことを積み重ねていくことで、『郷土の記憶』が継承されればいいなと思います。子どもたちに聞いてみると、五感を開くとやっぱり今まで気づかなかったことがいっぱい見えてくるということ、さらに『オープンマインド』ってすごく大事なんだなということ、それを、1年間でみんなが体験的に理解してくれるということが非常にうれしいことです。

### 現代社会の志向と八雲の精神性が響き合う

小泉八雲自身は、芸術についてこう言っています。「芸術とは音楽、絵画、詩、戯曲、小説など、



どのような形式をとるにせよ人生を情緒的に表現するもので、人生に対する真理 (truth) をあらわし、物質的ではなく倫理的な理想を扱うもの」(『至高の芸術について』“The Question of the Highest Art”)。先ほどご紹介したように、「超自然な物語の中には一面の真理があらわれていて、その真理に対する人間の関心は将来も不変」(『小説における超自然的なものの価値』)だと予言しています。

まさに今、文化資源的な着想で、資源化、舞台化に取り組んでいると、八雲が言っていたことは嘘ではなかったなと感じられます。現に八雲の『怪談』の作品は、この3年間で新たにアイルランド語とルーマニア語とスペインのバルセロナ地方の地域言語のカタロニア語に翻訳されています。カタロニア語の『怪談』ですが、コロナ禍に入る寸前でしたが、小泉八雲記念館の受付で「Bon Koizumi!」って叫ぶ人がいるので飛んでいくと、翻訳者の方がバルセロナから自分でカタロニア語に訳した『怪談』をわざわざ携えて松江に来てくださったことがわかりました。やっぱりそこには怪談文学に何らかの普遍性、あるいは真理というものが底流しているからではないかと思えます。(スクリーンに様々な言語に翻訳された八雲作品の紹介を投影しながら) 一番右はイスラエト語なんですね。本当に八雲の作品は今もいろんな言語に翻訳されて増殖しています。

八雲はこう言っています。「自然は過ちを犯さない。生き残る最適者は自然と最高に共存できて、わずかなものに満足できる者。宇宙の法則とはこのようなものである」(小泉八雲「極東の将来」中島最吉訳)。これは『極東の将来』という講演の中で語った一文ですが、これはまさに現代社会に必要なことを語ったのではないかなと思います。現代社会の志向と八雲の精神性に非常に響き合うものを感じます。特にSDGsという観点からもそうだと感じます。

### 人間中心主義ではない新しい未来のためにも、『郷土の記憶』を伝えていく

最後にこちらの写真を見ていただきたいと思います。(スクリーンに水木しげる氏と小泉凡氏、荒俣宏氏の三者が鼎談する様子の写真を投影しながら) 水木しげるさんが亡くなる4カ月に、島根県美保関というところで、荒俣宏さんを交えて3人で鼎談する機会がありました。

その時に水木さんが「島根半島の『浦』には大切なものがいっぱいある」と。日本海側には入江のような『浦』がいっぱいある。『浦』はバックヤードの「裏」にも通じるし、「うら悲しい」という言葉は「心悲しい」と書くんですね、『浦(うら)』にはものの本質が宿る場所という意味があると思うんです。そうした『浦(うら)』の記憶というものをちゃんと残していかなきゃいけないということをおっしゃったんです。水木さんは、八雲もきっと島根半島の浦々のそういうところにも興味があったのではないかなと言われました。

(スクリーンに御神木の写真を投影しながら) もう一つは島根県あたりにはこうした御神木がたくさんあります。荒神の木として祀っているのです。松江市八雲町の樹齢600年のスダジイの木ところで水木さんがこんなことを言われました。「この木は600年生きている。人間はせいぜい60年くらいしか生きない。わかるわけがないんだよ」と。これが生前の水木さんからうかがった最後の言葉になりました。水木さんも八雲も人間中心主義ではない、そういった、新しい未来をつくっていかなければならないと考えていたのです。

『郷土の記憶』を舞台化、資源化していくことの大切さを八雲の事例を通してお話しさせていただきました。時間が参りましたので、拙い話でしたがこれで終わらせていただきます。ご清聴いただきありがとうございます。